

いつか

夕陽をみていたのは
あの子だけだった。
あの子は丘の向こうに沈む夕陽を
待つことができた。
ただただ
沈みゆく真っ赤な太陽に趣を感じられた。
「きれいだよ！」
声をかけられ
隣に立つ度、同じものを見ていると思っていた。
あの子が去って
一人立って見る夕陽。
夕陽をみていなかったのだと気づく。
鈍色の空も
澄んだ青空も
風も
花も
星も
きつと、あの子の心も。
いつか手紙を書きたい。
会える日よりも早くがいい。
夕焼け空のじんわり変わる様を楽しめるようになった時、
ありがとうを添えて。